神戸女学院大学論集　第61巻第2号　Kobe College Studies Vol. 61 No. 2（December 2014）

人形遊び技法における作話の共同構築過程のコード化と幼児の対人適応との関連

石　谷　真　一

Marking Co-constructed Process of Stories with Codes in Doll Play Technique and Its Relation with the Interpersonal Adaptation of Preschoolers

ISHITANI Shinichi

神戸女学院大学 人間科学部 心理・行動科学科 教授
連絡先：石谷真一　〒662-8505　西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学人間科学部心理・行動科学科
ishitani@mail.kobe-c.ac.jp

要　旨

本研究では、人形遊び技法における作話を幼児と面接者による共同構築と捉え、その際の両者の相互交流プロセスをユニットに分割し、各ユニットの両者の交流に自己調節－相互交流調節の観点から考案したコードを付けた。39人の幼児が人形遊び技法で作成した156ストーリーの共同構築プロセスを1091ユニットに分け、各ユニットの幼児と面接者の言動にそれぞれ自己調節のコードを付けた。そして両者の自己調節コードの適合性から相互交流調節コードを決定した。本研究では同時に、園教諭より幼児の園生活での対人適応を聴取し、両調節スコアとの関連性を検討した。またメンタライジングの観点から幼児の作成したストーリーを評定し、その評定得点との関連性も検討した。その結果、園生活で対人適応が良好な幼児、作話評定得点の高い幼児は、そうでない幼児に比べて、面接者との関係と作話課題とを統合した自己調節、相互交流調節の割合が高かった。考察において、本研究の相互交流プロセスのユニット分割と考案した調節コードについて、母－乳幼児相互交流研究が焦点を当てる単位や調節概念と識別することで明確化を試みた。

キーワード： 人形遊び技法、作話の相互交流プロセス、自己調節および相互交流調節、
幼児の対人適応、メンタライジングの観点からの作話評定

Summary

In this study the author considered preschoolers' stories as co-constructed between interviewees (children) and their interviewers (students) in doll play technique, divided their mutual interactive processes into units, and marked their interactions of each unit with codes which were developed by him from the viewpoint of self-regulation and mutual interactive regulation. In fact he investigated 156 stories which 39 preschoolers made, divided their co-constructive processes into 1091 units, and marked the participants' interactive behaviors of each unit with codes of self-regulation per each participant. He also deduced codes of mutual interactive regulation from the suitability between participants' codes of self-regulation. The author also heard the preschoolers' interpersonal adaptation in their kindergarten's lives from their teachers, and examined the relation between regulation scores and their interpersonal adaptation. Furthermore, he calculated evaluation points of preschoolers' stories from the view point of Mentalizing, and examined the relation between regulation scores and story evaluation points, too. In the results, the preschoolers who were considered more adaptive by their teachers, and who got higher points of story evaluation, had high ratios of the combination of regulation which they could integrate addressing story-making with maintaining interaction with their interviewers compared to the others. In discussion the author tried to clarify the unit and the code of regulation by distinguishing from ones that the studies of infant-mother interaction focus on.

Keywords: doll play technique, the mutual interactive process while making stories,
self-regulation and mutual interactive regulation, interpersonal adaptation of preschoolers,
story evaluation from the viewpoint of Mentalizing

1．問　題

（1）　人形遊び技法とその相互交流プロセス

臨床心理学あるいは発達心理学において、幼児の心の内面（表象世界 representational world）を知る手法に人形遊び技法（Doll Play Technique 以下、DPT と略記）がある。筆者は幼稚園児を対象に人形遊び技法を行い、幼児の反応について検討を行ってきた（石谷 2009,12,13）。人形遊び技法とは、面接者が限られた人形等の玩具を用いて日常的な葛藤場面を演出し、幼児がそれに続くストーリーを作成するという、投影的な手法の心理テストである。幼児が葛藤に対処する行動や結末を想像する際に、その子の表象世界が投影されるというものである。以前にも紹介した（石谷，前掲）が、人形遊び技法は幼児の心の多様な側面の発達研究、また臨床的な問題を呈する幼児の表象世界を把握する際のツールなどとして米国では活用されているが、日本ではまだあまり普及していない。臨床心理学では一種の投影法として理解されており、その分析法も、主として幼児の作ったストーリーに注目し、その内容面、すなわち登場人物の描写、登場人物間の関係性、提示された葛藤状況への対処と結末などから、幼児の自己表象や対象表象、あるいは関係表象を読み取ろうとするものがほとんどで、いくつかのコード・システムも開発されている（Robinson, J. & Mantz-Simons, L. 2003, Warren, S. 2003, Emde, R. et al. 2003）。

しかし DPT は多かれ少なかれ、幼児と面接者との対話を通してストーリーが作成されるのであって、大人を対象にした投影法検査のように反応生成が専ら被検者の心の中で完遂するものではない。実際、筆者の経験では、上記のような内容分析に堪え得るストーリーになるには、面接者が幼児に問うたり筋を整理したりする働きかけ（発達心理学では scaffolding と呼ぶ）が多くの場合欠かせない。つまり DPT で作られるストーリーは幼児と面接者との共同構築と見なすべきであって、表象世界の純粋な投影反応ではないと筆者は考える。さらに表象世界を窺えるほど内容のあるストーリーを作れない幼児も少なくない。代わりに面接者とのやり取りに、情動反応や行動と言った水準で表現されていると見なせることも多い。こうした場合、ストーリーの内容だけを分析対象としていたのでは、幼児の心について得られる情報は極めて限られたものになってしまう。確かに既存のコード・システムもストーリーの内容ばかりでなく、ストーリーの一貫性や構成度といった内容ではなく形式・構造的な側面や、面接者との関係性を評定するコードを含めているものがある。そうではあっても、やはり表象世界を捉える主たる側面は内容にあり、相互交流のプロセスをコード化した研究は見られない。そこで本研究では、ストーリーを作成する幼児と面接者との相互のやり取り、すなわち相互交流プロセス自体を分析の対象とし、プロセスのコード化を試みる。またそのコードによる相互交流プロセスのスコアリングの結果と対象児の対人適応との関連性を検討する。

（2） 相互交流プロセス分析の理論的・方法的基盤

しかしまず、相互交流プロセスの分析で捉えられるものと、ストーリーの内容分析によって捉えられる表象世界との異同について明確にしておく必要がある。実は相互交流プロセスの分析は、乳児と母親の対面相互交流の研究として長い歴史があり、その研究成果を大人の心理療法プロセスの研究に応用しようとする試みも始まっている（Beebe, B. & Lachmann, F. M. 2002, Beebe, B. et al. 2005, Boston Change Process Study Group 2010）。本研究はこれらの先行研究に倣い、作話の相互交流には、以下に述べる乳児と母親の相互交流と多くの共通点を含んでいると考える。

乳児と母親との相互交流は互いに相手の志向性を直接的に感受し、それに応じることで続いていく。乳児にはこの感受力が早くから備わっているだけでなく、相手との交流を維持し強化する社会的な指向性（あるいは動機）も備えている。このように他者に開かれ他者とつながる一方で、乳児は一個の心理的存在として凝集性を維持し高め安定を維持しようとする能力と動機も備えている。Sander, L.（1975）はこれを自己組織化と名づけた。Sander, L.（1975, Nahum, 2000, BCPSG2010）によれば、他者に開かれつながることは自己組織化と対立する面もある一方、自らの志向性を明確に感受されることで自己組織化が促進される面もある。実際に母子の相互交流は、必ずしも対称的ではないが、自己組織化に向かう行動と他者に応じる行動との相互交渉の連続である。このように乳児の自己組織化は母親の自己組織化並びに両者の相互交流の組織化と不可分で、互いに影響を及ぼし合う一組となった二者関係システムとして推移するという見方が優勢になってきている（Beebe, B. et al. 2005, BCPSG 2010）。二者関係システムにおいて、各自の自己組織化に向かう働きを自己調節と呼び、両者の交流を維持し組織化する働きを相互交流調節と呼ぶ。自己調節と相互交流調節は二者関係システム内のサブシステムに相当し、両調節は絶えず影響を与え合い受け合いながら展開する。ところで乳児は、度重なる相互交流の経験を通し、交流の推移に対する見通しとそれによる自己の状態の予測をもつようになり、好ましい自己の状態を招き寄せ、好ましくない状態に至らぬための自己調節と相互交流調節の方略を持ち始める。これは「関係性をめぐる暗黙の知（implicit relational knowing）」（BCPSG 2010）、あるいは「他者と共にいるあり方（the way of being together with other）」（Stern, D. 1985, 95）と呼ばれる。

これは主たる養育者との関わり合いの中でその原型が形作られるが、養育者以外の相手との関わり合いにも適用されるような一般性を持つことが知られている。その一方で養育者以外の新たな相手との関わり合いによってたえず更新されるという面も同時にもつ。その結果、乳児のみならず人が生涯にわたって無自覚のうちに変化しながらも維持し続けるものである。これは一瞬一瞬のまなざしや表情の交換や発話の調子、姿勢の変化等微細な言動であるが、それらがより大きなまとまりとして愛着行動パターンを形作ったり、象徴水準の自己表象や他者表象あるいは防衛機制にもつながっていくと考えられている。このように「他者と共にあるあり方」は表象世界とつながりをもつがもっとミクロな対人関係の手続きに関する表象であり、同じく人の対人行動や自己組織化を左右するが、象徴水準の表象世界とは別個に一瞬一瞬の相互交流を通して影響する。したがって DPT の相互交流プロセスの分析によって捉えられるもの

は、幼児の「関係性をめぐる暗黙の知」「他者と共にあるあり方」であって、DPTの内容分析で捉えられる象徴水準の表象世界と別次元のものであることを確認しておくことは重要である。

次に、乳児研究では相互交流をプロセスとして捉えるために、ビデオ録画を基に乳児と母親の行動をミリ秒単位で見ていくのが一般的であるが、DPTの相互交流プロセスは以下のような時間単位で分析する。乳児研究では乳児と母親の表情や行動の生起・変化（すなわち相互交流の一単位）には何らか一つの志向性（意図や動機等）が含まれていると考えられている。これを敷衍し、幼児と面接者のある特定の意味を宿したやり取りを一単位（ユニット）と見なし、相互交流プロセスを分割する。乳児の場合と同様、視線や表情、また仕草等の非常に短い時間単位でのやりとりも生じているが、DPTは作話という目的のある共同作業における相互交流であることを鑑み、作話と言う課題に対して幼児及び面接者がある特定の意味を帯びた言動を交わすことを以て一ユニットと考える。すなわち、一ユニットには、幼児及び面接者の作話に向けた一つの志向的態度（一塊の思考、感情状態、行動等）が言動から読み取れ、しかもその前後のユニットの言動とは志向的態度が区別できることを分割の基準と定めた。

（3） 相互交流プロセスにおける自己調節－相互交流調節のコード化

①自己調節コード

次に相互交流プロセスのコード化について述べる。乳児の相互交流プロセスの研究では乳児（と同時に母親）の行動を直接指標として用い、乳児（あるいは母親）の何らかの行動を各自の自己調節の表れ、また相互交流調節の表れと見なす。例えば母親と乳児があやしあやされる過程で次第に両者の興奮が高まり、乳児が好ましく経験できる範囲を越えそうになると、乳児は母親から視線や顔を逸らすという行動に出る。この‘逸らし’は乳児が興奮状態を最適な範囲内に留めるためにとった自己調節の行動と解せる。しかし乳児の‘逸らし’を見た母親は、少し間を置くとかあやしかけを少しトーンダウンするなど相互交流を修正する。その意味で乳児の‘逸らし’は自己調節ばかりでなく相互交流調節をも担う行動と解せる。このように相互交流場面で表出される行動は、自己調節の表れであると同時に相互交流調節の表れでもある。これを踏まえ、各ユニットの幼児（と同時に面接者）の言動はまずは自己調節の表れと捉え、その自己調節の性質に応じたコードを付ける。自己調節の性質とは、先の乳児の‘逸らし’であれば、興奮の抑制と言えるだろう。しかしDPTの相互交流にはストーリーを作成するという課題があり、作話への取り組みという両者の自己調節が期待される。しかし実際には作話に向かわない自己調節も見受けられる。そこで作話に向かう自己調節か、作話に向かわない自己調節かに二分する。また作話に向かう自己調節も実際の経験から大きく二つに分けられ、まず一つは面接者の提示する情報に注意を向け取り込むもの（[取り込み]）、もう一つはストーリーを言動で実際に表出し伝達するもの（[表出]）である。なお［表出］の亜型として面接者の暗示や誘導に沿って表出するもの（[受諾的表出]）を加えた。他方、作話に向かわない自己調節では、作話に向かわずどのような自己調節行動を採ったのかに着目する。すなわち実際の子どもの言動に基づき、人形等のモノに関心が向かい面接者の意図を無視して人形等を弄ぶこと

表１　幼児及び面接者の自己調節コード

a	取込	出だしの葛藤やジレンマを取り込む	A	足場作り	出だしの提示、筋を明確にするための質問や確認
b	表出	ストーリーを表出し伝達する	B	調律	幼児の作話を受容し、共感的調律的に応答
b'	受諾表出	面接者に示唆されたストーリーを表出			
c	逸脱	人形等の弄び、出だしとは無関係なストーリー	C	統制	課題に向かわせるため幼児の言動を制止、指示、誘導
d	退却	無反応、課題の拒否、面接者への依託	D	放棄	幼児の言動の放置放任、要求に応じ充足させる
e	関係への執心	面接者との交流に没頭	E	関係への脱線	課題を棚上げにして幼児との交流に専念

や、出だしを無視して自分なりのストーリーを展開する［逸脱］、課題場面からの引きこもりや作話を面接者に委ねる、あるいは課題を拒否する等の［退却］、課題そっちのけで面接者との関係に専念する（［関係に執心］）という３種のコードを設定した。この３種は作話と言う課題に向けた共同作業と言う三項関係の三項のいずれかが遠ざけられているとも解せる（［逸脱］では面接者が、［退却］では幼児自身が、そして［執心］では課題が遠ざけられている）。以上、幼児の自己調節コードは６種類のコードを用意し、一つのユニットにつき一つのコードを付けた（表１）。

乳児研究の二者関係システムモデルでは、母親の行動も当然分析の指標とされる。本研究においても面接者の言動をコードするが、そのコードは幼児の自己調節コードに対応する形で、作話に向かう調節と作成に向かわない調節にまず二分する。前者は幼児にストーリーの出だし（stem）を提示したり幼児の作話の筋を明確にする質問や確認を行うもの（［足場作り］）と、幼児の作話を促すように幼児に沿い共感的また調律的に応答するもの（［調律］）とがある。後者には幼児を作話に向かわせようと幼児の言動に統制的に応じるもの（［統制］）、課題に向かわせることを放棄し幼児の言動を放置・放任したり幼児の要求に従うもの（［放棄］）、課題を棚上げにして幼児にパーソナルに働きかけるもの（［関係への脱線］）の５種類である。こちらも５種類のコードを用意した（表１）。面接者の側の調節はほとんどが幼児への働きかけとして表現されるので自己調節とは見えにくいが、三項関係において幼児が課題と面接者との関わりの両方を組み込んだ言動をするのと同様、幼児を課題に向かわせようとする意図と幼児との関係を保とうとする意図との面接者の心の中での交渉の結果でもあり、面接者の自己調節と考える。

②相互交流調節コード

本研究は上記の自己調節行動のコード化に加え、各ユニットでの幼児と面接者の自己調節コードの組み合わせから、そのユニットにおける相互交流調節もまたコードする。上述したように自己調節行動は同時に相互交流調節行動にもなることから、両者の自己調節のセットを一つの相互交流調節と見なし、その性質に応じたコードをつけるのである。先の乳児と母親の交流場面を例にとれば、乳児の‘逸らし’に応じて母親があやしかけを緩めれば、相互交流は協調的で適合していると見なせるが、母親がさらにいっそう乳児にあやしかけ、視線を逸らす乳児を追いかけるような自己調節行動に及べば、相互交流は非協調的で不適合なものとなり、乳児の先ほどとは異なる自己調節行動をさらに引き出すことになるだろう。一般に乳児を世話する母親は、授乳や着替え等の現実的な目的と乳児との協調関係を維持するという目的との両者を統合しながら乳児と交流する。面接者も幼児との協働関係を形成・維持しながら幼児を作話

表2　相互交流調節コード

協調－推敲	幼児の作話を筋の通った一貫性のあるものに共同構築する A-a, A-b, A-b', a-A, b-A, c-A, c-C の組み合わせ
協調－促進	幼児の作話表出を促し、共同作業の中で主体的に取り組む a-B, b-B, d-B, B-a, B-b, B-b', D-b の組み合わせ
非協調－不成立	作話に向けた協働関係（間主観的関係性）が成立しない A-c, A-d, A-e, B-c, C-c, C-d, d-A, e-A の組み合わせ
非協調－忘却	課題以外のところでのみ関係が成立するが、課題に向かわない c-B, c-D, d-D, e-B, e-D, D-c, D-e, E-c の組み合わせ
非協調－消失	作話に必要な適度な遊びや間が消失し、幼児の主体性が乏しい C-b, C-b', C-a, b-C, d-C の組み合わせ ＊イニシアティブを取っている側のコードを先に記している

へと導こうとしている。つまり二人に課された何らかの目的（あるいは課題）に向けて相互交流調節は働く。したがって自己調節と同様に、相互交流調節も作話という課題に向けて協調的・適合的か、そうでないかに大別できる。さらに協調的調節は、作話を促し支え刺激することで幼児の主体的な取り組みを促進する交流調節（[協調－促進]）と、幼児の作話を筋の通った一貫性のあるものへと推敲する（[協調－推敲]）とに分ける。非協調的調節は、そもそも作話に向けた協働関係が成立していないもの（[非協調－協働関係の不成立]）、幼児を課題に向かわせられず課題とは異なる目標に協働関係が向かうもの（[非協調－課題の忘却]）、面接者の統制的な働きかけにより課題指向的な協働関係は成立しているが、自発的な作話に必要な適度な遊びや間が消失しているもの（[非協調－遊びの間の消失]）の3種に下位分類する。相互交流調節の5コードと自己調節コードの組み合わせは表2に示すとおりである。なお、各ユニットの両者の自己調節コードの組み合わせをそのユニットの相互交流調節のコードとする際、各ユニットで幼児と面接者のいずれがイニシアティブを取っているかを考慮し、イニシアティブを取っている方の自己調節コードを先に記すことにした。一般に相互交流とは役割交代を繰り返しながら進むものであり、そのユニットでの関係の動きを規定している側をイニシアティブを取っていると考える。

（4）　相互交流プロセスのスコアと幼児の対人適応との関連性の検討

このように本研究では、DPTにおける作話を幼児と面接者との共同構築と捉え、その際の相互交流をユニットに分割した上で各ユニットの幼児と面接者の言動を自己調節の観点からコードする。さらにその自己調節コードの組み合わせから各ユニットの相互交流調節をコードする。こうして得られた二種類のコードから最終的には幼児の「関係性をめぐる暗黙知」「他者と共にあるあり方」を捉えることを目指す。これは上述したように、幼児の表象世界そのものというより、表象世界という建物を構築するブロックのようなものである。しかし他者との関係により直接的に表れる性質のものでもある。したがって幼児のコードの集計（スコアと呼ぶ）は幼児の日常の対人関係を反映していることが予想される。そこでDPT対象児の園生活での対人適応に関する情報と照合し、その関連性を検討する。スコアに表れる「他者と共にあるあり方」は面接者との関係の持ち方であるが、上述したようにこれは特定の他者との関わり

表3　作話評定の観点と基準

1	葛藤（ジレンマ）の理解の程度 3．十分理解　2．不十分　1．理解なし・誤解
2	葛藤（ジレンマ）への取り組みの程度 3．十分関与　2．不十分　1．取り組みなし
3	登場人物（主に主人公）の志向性の描写の程度 3．内面描写　2．十分推測可能　1．推測困難
4	解決解消へと方向づけられたストーリーの一貫性 3．結末まで一貫　2．一貫性が不十分 1．筋が乏しくストーリーの体を成さない

方に限定されない一般的な性質を持つので、園教諭や他児との関わりに基づく園生活での対人適応にも通じる面があると予想される。ただし今回は個人情報守秘の面からも、具体的な情報との照合ではなく、情報を基に筆者が対象児を懸念群と適応群に分け、両者の間でスコアを比較するという方法を採る。懸念群とは、園教諭により園生活での何らかの不適応・問題行動が報告された幼児達である。

本研究では、さらに別の観点からも幼児の対人適応と調節スコアとの関連を検討する。それは幼児の作成したストーリーの形式面の評定との照合である。形式面とはストーリーの一貫性や構成の程度を指す。DPT では対人場面での何らかの情緒的葛藤やジレンマを提示し、それが最も高まった所でその後の展開を幼児に作らせる。内容分析が可能なストーリーを作るには、葛藤やジレンマを登場人物の身になって認知的情緒的にある程度追体験できることが前提となる。しかも幼児自身の心に引き起こされた認知的また情緒的な不協和あるいは動揺と向き合い、それを緩和・解消する術をストーリー内の登場人物間の関係行動として描き出さなければならない。筆者は以前、ストーリーの形式面の成否を分ける要因として、幼児のメンタライジング能力に着目した（石谷 2012）。メンタライジング概念およびメンタライジング能力とストーリーの形式面との関連についてはそこで詳述したが、一貫性や構成度のあるストーリーを作成するには、幼児期後期に一定の達成を見るとされるメンタライジング能力が前提になると考えられる。そもそもメンタライジングは他者との関係への、そして自分自身への情緒的適応と密接に関連する能力として概念化されたもの（Allen, J. G. & Fonagy, P., 2006）であり、DPT のストーリーの完成度にとどまらず、幼児の対人・情緒的な適応に直結する指標である。以上から、メンタライジング能力が規定するストーリーの形式面と、作話プロセスの自己調節－相互交流調節コードとの間には関連が予想される。形式面は上述した順に、葛藤やジレンマを認知的情緒的に理解できているかどうか、葛藤やジレンマに対処できているかどうか、登場人物を心理的存在として志向性のある者として描けているかどうか、最後に葛藤やジレンマの緩和・解消に向けて一貫した筋を作れたかどうかの4点について3段階で評定し、その得点を作話評定得点とする（表3）。この作話評定得点と自己調節及び相互交流調節スコアとの関連性も合わせて検討する。

2．方　法

（1）　分析対象

2013年６、７月に私立幼稚園で実施したDPTの対象児39名のDPT作話過程計156個のプロセスの映像記録及び逐語録。対象児の概要を表４に示す。また用いた４つのDPT stemを表５に示す。なおDPTの実施方法については石谷（2009）を参照されたい。面接者はこのDPTの訓練を受けた学部学生23名であった。また対象児の対人適用についてはDPT施行後に筆者が園教諭に結果のフィードバックを行った際に聴取した。

表４　対象児の概要（人数）

	年長男児	年長女児	年中男児	年中女児	合計
適応群	10	8	1	9	28
懸念群	2	3	4	2	11
	12	11	5	11	39

表５　用いた話の出だし（stem）

Ⅰ　友達が大切にしている玩具を返してくれない。
Ⅱ　母親の留守中幼い弟（妹）が泣き出し母親に禁じられた冷蔵庫を開けてミルクをあげるかどうか。
Ⅳ　飼い犬が逃げ出したことで口論する両親の前に居合わせる。
Ⅴ　母親が大切にしている鏡を不注意にも割ってしまう。

（2）　分析手続き

156個のプロセスをコード化の対象となるユニットに分割し、各ユニットの継続時間を５秒単位で記録した。その結果1091ユニットに分割でき、続いて各ユニットの幼児及び面接者の言動に表１にある基準で自己調節コードをつけた。その上で両者の自己調節コードの組み合わせから表２にあるように相互交流調節をコード化した。一方、作話評定に関しては、表３の基準で156個の作話を評定し評定得点を求めた。これにより、各対象児について、４つのstemでの作話評定得点、stemごとのユニット数とユニット継続時間、各ユニットの幼児及び面接者の自己調節スコアと相互交流調節スコアが得られ、これらを集計して統計分析の対象とした。

3．結　果

（1）　自己調節スコア、相互交流調節スコアの性差・年齢差

初めに、ユニット数と反応時間について性別・年齢（年長・年中）別に平均値と標準偏差を算出し、性と年齢を二要因とする分散分析を行った。全体ではユニットは平均28個、反応時間は600秒強であり、幼児と面接者のイニシアティブを取っているユニット数はおよそ11：17個、イニシアティブを取っている反応時間はほぼ同じであった。また分散分析の結果、ユニット数

では有意差は見られず、反応時間では幼児がイニシアティブを取っている反応時間では年中男児が有意に長く、また面接者のイニシアティブを取っている反応時間と総反応時間では年齢の主効果が有意で年中児の方が年長児よりも長かった。ユニット数および反応時間が年中男児で多いのは、表4に示したように5人中4人までが懸念群であることが影響していると思われる。すなわち、作話にしっかりと方向づけられたやり取りが生じにくかったと考えられる。年中児の方が面接者の反応時間と総反応時間が長かったのも、作話に方向づけるために面接者からの関わりが多く必要だったためと考えられる。

DPTの作話は必ずしも言語のみで表現されるわけではないが、年齢と共に発達する語彙力や構文力にも影響される（Emde, R., et al. 2003）。また面接者との関係性の面では男児よりも女児の方が一般的には疎通性が良いことが知られている（Emde, R., et al. 前掲）。そこで年齢や性の、自己調節並びに相互交流調節スコアへの影響について、あらかじめ確かめておく必要がある。そこで年齢と性を独立変数とし、幼児と面接者の自己調節スコア並びに相互交流調節スコアを従属変数とする二要因の分散分析を行った。

まず幼児の自己調節スコアでは、「執心」にのみ有意な交互作用が見られ（$F=13.199$, $p<.01$）、年中児のみ男児が女児より高かった。また年齢の主効果、性の主効果とも「逸脱」でのみ有意（それぞれ $F=10.587$, $p<.01$　$F=4.245$, $p<.05$）で年長児よりも年中児、女児よりも男児の方がスコアが高かった。この結果も純粋に年齢や性の要因に因るものではなく、懸念群の幼児の特徴を反映しているとも考えられるが、年齢や性の影響を他のスコアとも合わせて考慮する必要がある。他方、面接者の自己調節スコアでは、「足場作り」で有意な性の主効果（$F=4.647$, $p<.05$）、「放棄」で有意な年齢の主効果（$F=7.646$, $p<.01$）が見られ、「足場作り」では女児よりも男児のスコアが高く、「放棄」では年長児よりも年中児のスコアが高かった。「放棄」は年中男児のスコアが飛びぬけて高く、懸念群の特徴が反映されたと考えられる。「足場作り」では加えて年齢の主効果も有意な傾向性（$F=3.492$, $p<.10$）を示し、年中男児のスコアが最も高く、年中女児、年長男児と続き、年長女児のスコアが最も低かった。懸念群が過半を占める年中男児のスコアが最も高いのは、幼児を課題に向かわせるために面接者の補助が最も必要だったと考えられる一方で、年長児ほどまた女児ほどスコアが低く、補助が少なくても済んだことを示していると考えられる。先の「逸脱」の結果とは真逆になっており、やはり課題からの逸れ易さの面では年齢と性の影響を考慮する必要があると思われた。最後に相互交流調節では「非協調－忘却」で有意な交互作用（$F=7.784$, $p<.01$）が見られ、年中でのみ男児のスコアが女児よりも有意に高かった。これは先の「放棄」スコアの高さと合わせて懸念群の相互交流の特徴が反映された面が強い。また「非協調－不成立」では有意な年齢の主効果（$F=9.408$, $p,.01$）に加え、性の主効果も有意な傾向性（$F=3.303$, $p<.10$）を示した。年中男児のスコアが抜きんでて高かったが年中女児も年長男児よりも高く、課題に向かう間主観的な関係の作りづらさは年中児の方が強いことも示された。このように「逸脱」「足場作り」そして「非協調－不成立」等のスコアには年齢の影響が表れていると考えられ、実際の施行場面の印象とも一致する。これらを考慮に入れた上で、次に適応群と懸念群との比較を行う。

(2) 適応群と懸念群の自己調節スコアの比較

スコアの比較の前に、適応群と懸念群とでユニット数と反応時間を比較した（表6）。ユニット数全体、幼児または面接者がイニシアティブを取っているユニット数共に有意差は見られなかった。反応時間では全体及び面接者の反応時間は懸念群の方が長い傾向性が見られた。懸念群の方が幼児も面接者も平均すると8，90秒づつ適応群よりも反応時間がかかっていた。これは後述するように懸念群の幼児が作話課題から逸れやすく、相互交流も方向が定まりづらく、交流を軌道に乗せたり方向づけるために時間を要したことを示していると考えられる。

次に、適応群と懸念群の幼児の自己調節スコアを比較した（表7）ところ、「取り込み」以外のすべてのコードで有意差が見られ、「表出」は適応群が高く、「受諾的表出」「逸脱」「退却」「執心」は懸念群が高かった。「取り込み」「表出」といった作話に向かう調節の割合は適応群では全ユニットの80％を超えているのに対し、懸念群では50％程度であった。一方、面接者の自己調節スコアは「統制」及び「放棄」で、懸念群の面接者の方が有意に高かった（表8）。それでも面接者の自己調節スコアで作話に向かう「足場作り」と「調律」は適応群で全ユニットの90％、懸念群でも80％を占めた。幼児は適応群と懸念群とで自己調節に顕著な違いが見ら

表6　適応群と反応群のユニット数及び反応時間の平均と標準偏差

	ユニット数	幼児 initia.	面接者 ini.	反応時間	幼児 initia.	面接者 ini.
適応群 M	27	9.8	17.2	567.1	203.9	190
SD	7.19	4.65	5.17	184.9	147.8	103.9
懸念群 M	30.4	12.5	17.9	750	281.4	283.2
SD	11.9	6.09	7.75	391.3	241.6	206.2
t 値	1.073	1.457	0.326	1.995+	1.222	1.882+

面接者 ini. の反応時間は出だしの提示時間を除いている

表7　適応群と懸念群の幼児の自己調節スコアの平均と標準偏差

	取込	表出	受諾表出	逸脱	退却	執心
適応群 M	6.3	16.6	0.8	1.8	1.6	0.04
SD	2.28	5.67	1.59	3.32	1.71	0.19
懸念群 M	5	11.5	3.6	6.4	3.1	0.9
SD	1.73	7.48	2.02	7.47	2.3	1.58
t 値	1.687	2.317*	4.463**	2.696*	2.263*	2.935**

*p<.05,　**p<.01

表8　適応群と懸念群の面接者の自己調節スコアの平均と標準偏差

	足場	調律	統制	放棄	脱線
適応群 M	16.4	8.5	1.6	0.4	0.07
SD	5.11	3.5	1.57	0.99	0.26
懸念群 M	16.5	8.6	3.9	1.5	0
SD	7.06	5.11	2.21	2.12	0
t 値	0.03	0.007	3.607**	2.148*	0.896

*p<.05,　**p<.01

表9　適応群と懸念群の相互交流調節スコアの平均と標準偏差

	協調推敲	協調促進	非/不成立	非/忘却	非/消失
適応群 M	15.4	7.9	1.2	1	1.6
SD	5.27	3.24	1.77	1.66	1.6
懸念群 M	11.7	6.1	5.6	4.5	3.4
SD	5.55	3.27	2.25	4.61	2.11
t 値	1.907+	1.589	6.429**	3.487**	2.877**

*p<.05,　**p<.01

れたが、面接者はいずれの群の幼児が相手でも作話に向かう調節をほぼ維持しており、懸念群の面接者の「統制」「放棄」の適応群に比べての高さは、懸念群の幼児の「受諾的表出」「逸脱」「退却」の高さに影響を受けたものと考えられる。

適応群と懸念群の相互交流調節スコアを比較した（表9）ところ、非協調の3カテゴリー、すなわち「不成立」「忘却」「消失」いずれも懸念群が適応群より有意に高かった。割合で見ても、適応群では協調的調節である「推敲」と「促進」が全ユニットの80%以上を占めたが、懸念群では60%に満たなかった。懸念群の幼児を相手にした面接者は作話に向けての自己調節が80%を占めたが、幼児の自己調節とかみ合わず協調的な相互交流調節には至らなかった場面が数多くあったと考えられる。以上、適応群と懸念群とでは幼児の自己調節スコア、また面接者との相互交流調節スコアに顕著な差が見られ、各群の幼児の日常での適応状況と軌を一にするものであった。

(3)　作話評定得点と調節スコアとの関連

適応群と懸念群の幼児計39名が作った156個の作話について、表3に示したような作話評定を行い、評定得点を算出した。評定得点は stem ごとの4基準の合計点と4つの stem を合わせた各基準の合計点、並びに総合計点を算出した。まず年齢と性を独立変数とし上記の9つの合計得点を従属変数とする二要因の分散分析を行ったところ、全ての合計点で年齢と性の主効果が有意あるいは有意傾向が見られた。いずれも年長児、また女児の方が評定得点は高かった。ただ5人中4人までが懸念群の年中男児の評定得点が他よりも極めて低く、それ以外は stem ごと・4基準合計で1点、総合計点でも4点以内の差に収まっており、さほど大きな得点差ではなかった。つまり年齢差および性差のみではなく対象児の適応差と関連が深いとも考えられる。そこで適応群と懸念群とで同様に9つの合計得点を比較したところ、全ての合計点で1%水準の有意差が見られ適応群の得点が懸念群よりも高かった。得点差も、stem ごと・4基準合計で3～4点、総合計点では15点も隔たっていた。以上から、作話評定得点は年齢及び性の影響を受けるとともに、適応にも深く関連する指標と見なすのが妥当であると考える。評定得点に表れるストーリーの形式面は先述したように幼児のメンタライジング能力を土台にしていると考えられ、メンタライジング能力が対人関係への情緒的適応と密接につながることを思えば、作話評定が適応群と懸念群とで差があることは納得できる結果であり、幼児の対人適応の指標としての作話評定の妥当性が逆に確認されたとも言えるだろう。

表10　作話評定得点群の概要（人数）

	得点範囲	平均点	年長男児	年長女児	年中男児	年中女児	含懸念群
群A 12名	48～44	46.6	3	5	0	4	1
群B 10名	43～41	42.2	4	4	0	2	0
群C 13名	38～28	32.8	4	2	3	4	6
群D 4名	23～18	20.3	1	0	2	1	4
全体		38.2	12	11	5	11	11

「含懸念群」は、各群に懸念群の幼児が何人含まれているかを示す

次に各stemの4基準合計点及び、4stemを合わせた各基準合計点の間で相関係数を算出したところ、.7～.9とすべての相関係数が有意で高い相関が見られた。そこで評定総合計点（最高48点、最低18点）の分布を考慮し、得点の高い方からA～D群の4得点群に対象児を分類した（表10）。評定得点の高いA群とB群には懸念群の幼児はほとんどおらず、反対に評点得点の最も低いD群は全員が懸念群の幼児であった。上述したように、日常の生活場面で対人的問題を起こしやすい幼児は、葛藤やジレンマを理解しそれを解決・解消に導くような方向性のある一貫した筋を作り出すことが難しいことがここでも確認された。このように作話評定群は適応群・懸念群と実際には重複する面もあるが、あくまで作成したストーリーの形式面に着目した対象児の分類であり、対象児の日常生活の対人適応を見た適応群・懸念群とは異なる指標として、作話評定群による調節スコアの比較を行った。

まず作話評定4群を独立変数、幼児及び面接者の自己調節スコアと相互交流調節スコアを従属変数とする1要因の分散分析を行ったところ、幼児の自己調節では「表出」「受諾的表出」「逸脱」で有意な群間差が見られ、多重比較の結果A及びB群とC及びD群との間に有意差が見られ、「表出」ではA群の方が、「受諾的表出」「逸脱」ではC、D群の方が高いスコアを示した。面接者の自己調節では「統制」で有意な群間差が見られ、C群がB群よりもスコアが高かった（表11, 12）。スコアが低得点のC及びD群では、作話に向かう調節が高得点群（A及びB群）より乏しく、反対に「逸脱」のような作話から外れる調節が目立ち、面接者が作話に引き戻そうと「統制」による調節を企てることが多かったと考えられる。相互交流調節では、非協調的調節の3コードすなわち、「不成立」「忘却」「消失」で有意な群間差が見られ、いずれもA及びB群とCまたはD群との間に有意差が見られた（表13）。非協調的調節は評定低得点群の方が高いスコアを示し、作話から外れる交流調節が多く生じていた。実際、A及びB群ではほぼ90％のユニットが協調的調節とコードされたのと対照的に、C群は67％、D群は50％のユニットにとどまった。高得点群と低得点群とでの相互交流調節スコアの割合の差は、上述した適応群と懸念群のそれをしのぐほどであった。以上から、自己調節及び相互交流調節のコードは作話評定と関連が見られ、メンタライジング能力の高さを推測できる作話評定高得点の幼児は、作話と言う課題に向かって自己と関係を調節していくことができていた。

表11　作話評定群別の幼児の自己調節スコアの平均と標準偏差

		取込	表出	受諾表出	逸脱	退却	執心
群A	M	6.2	18.8	1.5	0.25	0.92	0.08
	SD	1.27	5.18	1.31	0.62	1.38	0.29
群B	M	6.4	16.3	1	2.1	0.7	0
	SD	1.17	3.83	0.94	2.56	1.57	0
群C	M	5.9	12.5	3.38	3.2	2.9	0.62
	SD	3.21	8.1	2.47	4.43	2.54	1.45
群D	M	4.3	9.5	1.5	13.5	1.8	0.5
	SD	2.19	2.89	1.92	7.85	2.06	1
F値		0.987	3.692*	4.088*	13.022**	2.97*	1.168
多重比較			A>D	A,B<C	A,B,C<D		

*p<.05,　**p<.01

表12　作話評定群別の面接者の自己調節スコアの平均と標準偏差

		足場	調律	統制	放棄	脱線
群A	M	17.3	8.5	1.8	0.25	0
	SD	4.31	3.32	1.29	0.45	0
群B	M	15.4	9.4	1.3	0.3	0.1
	SD	3.92	2.88	0.68	0.48	0.32
群C	M	16.6	7.3	3.5	0.92	0.08
	SD	7.4	4.37	2.6	1.55	0.28
群D	M	15.8	10.5	2.5	2.3	0
	SD	7.81	6.46	2.65	3.3	0
F値		0.207	0.903	2.933*	2.524	0.476
多重比較				B>C		

*p<.05,　**p<.01

表13　作話評定群別の相互交流調節スコアの平均と標準偏差

		協調推敲	協調促進	非/不成立	非/忘却	非/消失
群A	M	16.5	8.4	0.75	0.33	1.8
	SD	4.17	3.37	1.29	0.65	1.29
群B	M	14.7	8.6	0.9	1.2	1.1
	SD	3.71	2.12	1.45	1.23	0.74
群C	M	13.1	5.9	4.1	2.2	3.2
	SD	7.51	3.75	2.5	2.51	2.49
群D	M	11	6.3	5.8	8.3	1.75
	SD	4	2.75	3.5	5.5	2.06
F値		1.376	1.975	10.709**	12.397**	3.024*
多重比較				A,B<C,D	A,B,C<D	B<C

*p<.05,　**p<.01

考　察

本研究では、作話に向かう相互交流プロセスを調節という観点からコード化し、そのスコアと幼児の対人適応及び、メンタライジング能力が関連すると考えられる作話の形式的側面とが関連することを確認した。これによりDPTによる幼児の心の理解に、相互交流プロセスの分析、特に自己調節－相互交流調節という二者関係システムの観点からの分析が役立つことが示された。しかしプロセスの分析から得られた情報を内容分析から得られる表象世界の理解と如何に結び合わせていくのか等、未だ検討課題も多い。そこで考察では、本研究の理論的背景とした乳児研究の方法的枠組みや調節の概念と、本研究のそれとの異同を吟味することで、本研究の枠組みの意義と問題点を明確にする。

（1）　交流プロセスの分析単位としてのユニット

まずプロセスの分析単位であるユニットは、乳児の対人相互交流の分析単位が長くても数秒であるのに比べ10倍もの長時間になった。ユニットは乳児研究で単位とされる視線の動きや表情の変化、手足の動き等を複数含みこんだより大きな単位であることは明らかである。ユニットの分割は、前後のユニットとは異なる課題に対する志向的態度で判断したが、実際にはひとまとまりの言語表出で分割されるのがほとんどであった。それゆえ各ユニットが含意するものは、言語化可能な象徴水準の意味内容であることが多かった。言葉を介した幼児との相互交流は、乳児との相互交流と異なり、非抽象的水準の情動・行動回路と象徴水準の言語・象徴表現回路の複合である。こうした理由から相互交流プロセスを分析する時間単位が乳児研究とは大いに異なったと考えられる。これは精神分析における自由連想において被分析者の連想の流れを追うのに近い。ただ被分析者の自由連想とは違って、幼児と面接者の相互交流プロセスであり、二者一組となっての共－自由連想過程と言えるかもしれない。その分、日常の心理臨床の相互交流プロセスを追う単位にも近く、DPTを離れて心理臨床における対人交流に広く適用できると考える。その反面、乳児の相互交流研究で見出された一瞬一瞬の微細な情動のやり取りの面が看過されやすく、非象徴水準の情動・行動表現を意識的に補って各ユニットの意味を補足する必要があると考える。

（2）　調節コードとスコアリングの再吟味～二者関係システムの観点から～

本研究では自己調節のコードとして５種類（幼児は亜型の「受諾的表出」を含む６種類）を考案した。ジレンマや葛藤を提示されて幼児の心に生じた揺らぎを、続く筋を作成することを通して収めるというDPT課題の心理過程を考慮し、本研究では幼児の心に生じる内的かつ象徴水準の作業を中心に自己調節を考えた。調節と言うと一瞬一瞬の身体・情動レベルの事象と考えられやすいが、Sander, L.（前掲）は象徴水準のファンタジーやナラティブ、防衛機制等も自己調節と見なしている。さらにDPTは面接者と共に筋を作るという三項関係場面であり、面接者との関わりと課題への取り組みとを並行させかつ統合していくことが期待される。それゆえ作話と言う課題との向き合い方に照らし、三項関係内での作話作業、あるいは三項関

係自体の綻びという面から自己調節のコードを定めた。このような調節コードの定義は本研究独自のものであったが、実際の幼児の反応に沿っており、かつ二者関係システムの範疇のものと考える。すなわち、本研究のコード（スコア）は、[共同作業場面での関係についての暗黙知]、あるいは［他者と共に何かに従事するあり方］を示すものと考えられる。心理療法場面を含む二者関係の多くは、何らかの課題に共同で取り組む三項関係場面である。したがって本調節コードは心理療法場面のプロセス理解にも適用できると考える。また、面接者のコードは幼児のコードに対応させるように定めた面もあるが、母親が幼児と共同で作話をする研究（Favez, N. 2003, Landau, R., Eshel, Y., Kipnis, V., & Ben-Aaron, M. 2003）での母親の関わりが、母親がリードして構成的な働きかけを専ら行うタイプ（「統制」に相当）、母親が無関心で幼児に作話を委ねるタイプ（「放棄」に相当）、幼児のイニシアティブに従うが同時に作話を補助するタイプ（「足場作り」「調律」に相当）に分類されたように、幼児と三項関係での共同作業に従事する大人がとる典型的な調節パターンを包含していると考える。したがって面接者のコード（スコア）は心理臨床場面での相互交流をセラピストの側から捉える際にも適用できると思われる。

ところで Beebe, B. ら（前掲）の乳児研究における自己調節－総合交流調節モデルでは、乳児と母親のそれぞれの行動が相手の行動によって規定されるか否か、すなわち随伴性を統計的に検証している。例えば乳児の時間的に 2 番目に観察された行動が、乳児の 1 番目の行動によって引き起こされた割合を自己相関として算出し、他方、対面する母親の直近の反応によって引き起こされた割合を相互相関として算出する。随伴性は両者の相関を合わせたものとなる。本研究はこうした随伴性を算出することはせず、両者の自己調節の組み合わせをその時点の相互交流調節と操作的に定義した。そして随伴性に代わって、相互交流調節の協調、非協調に着目した。二者関係システムを基盤にした研究には後述する Tronick, E. のように、随伴性よりも相互交流における両者の適合性とその時間的推移に焦点を当てる方法もある。本研究の相互交流調節の捉え方は Tronick, E. に倣ったものである。

Tronic, E.（1986, 98）は、相互交流調節を協調的調節と非協調的調節とに大別している。Tronic, E. によれば、乳児と母親との相互交流は両者がいつも調律し合っている（match）のではなく、交流にはたえず齟齬が生じ（mismatch）、再び両者が match な状態へと修復する過程が繰り返されるのであって、match は全経過の 1/3 程度に過ぎないという。大切なのは両者の修復への試みであって、乳児は調節してもらうばかりでなく、自ら主体的・能動的に関わり合いを修復する調節力を培うことができ、さらには相手の意識状態をも含みこんだ意識状態の拡張を経験できるという。二者関係の中で相互交流調節のプロセスを通してこそ、乳児の意識はより複雑でかつより一貫した組織へと発展するというのが Tronic, E. の主張である。これは臨床家が普段の臨床実践で経験している関わり合いを通じたクライエントの意識の変化とも共通する見解である。Tronic, E. の観点からすれば、非協調的な相互交流調節自体が問題なのではなく、そこから協調的な交流調節への修復が行えたかどうかが重要となる。Tronic, E. はもし修復が適わず、慢性的に mismatch の状態が続くなら、乳児は否定的な情緒に沈み、他者への関わりも物への探索行動も制限され、情緒的ならびに認知的な発達に悪影響を及ぼすとしてい

る。本研究では相互交流調節の継時的な推移を分析してはいないが、stem が進むにつれて、相互交流調節に変化が見られる例は数多かった。それは、心理面接がセッションを重ねる中で次第にクライエントの調節行動に変化が生じるのに似ている。DPT の枠組みでは stem をミクロ・セッションと捉え、stem 単位で調節行動の変化を追うという一種の系列分析が、幼児のレジリエンス、あるいはセラピーへの適応を予測したり、援助的関わりの焦点を定める上で役立つかもしれない。

(3) 関わることと関わらないことをめぐって

本研究では非協調的相互交流調節をさらに、課題に向けた協働関係の不成立、課題への指向を忘却した関係性、そして面接者の統制的な働きかけによって自発的な作話活動に必要な遊びや間が消失していしまっている状態、という3コードを設けた。これは実際の相互交流を観察して帰納的に案出したものであったが、それぞれの関係性は大変興味深いものに思われる。まず「不成立」は幼児が相互交流調節を犠牲にして自己調節に没頭しているあり方と解せるし、「忘却」は相互交流は維持できているものの面接者が自己調節を犠牲にして相互交流調節に重きを置いている、「消失」は反対に幼児が統制する面接者に応えて自己調節を後回しに相互交流調節を優先したあり方と解せる。後の二つは「不成立」とは反対に自己調節を犠牲にしているが、誰が犠牲にしているかで分かれると見ることができる。Beebe, B. ら（前掲）は乳児と母親の相互交流プロセス研究からバランスモデルを提唱しているが、このモデルでは両極に相互調節を犠牲にした自己調節への没頭と、自己調節を犠牲にした相互調節への没頭が置かれている。そしてその中間にある両調節のバランス、あるいは母子両者がのっぴきならないほど相手に感受性を研ぎ澄ましていることと、関わりが途絶えるほど関心を向けないこととの中間にある、ある程度の遊びのある状態の意義を強調している。上記の3コードはバランスモデルの両極に類似しており、三項関係での交流にも Beebe, B. らの見解が適用できると考えられる。

一方、協調的交流調節の「推敲」と「促進」は二人が作話に向けてタッグを組んで進んでいく共同構築の両輪と言ったイメージがある。実際、適応群や作話評定高群の幼児では両コードが80～90％を占めた。その中で、以下のような印象を覚える幼児も少なからず経験してきた。それは、作話評定も極めて高く協調的調節が全ユニットのほとんどを占めるような幼児で、自由で想像的なストーリーと言うよりも、優等生的で模範解答のような対処・解決に終始する者である。彼らは面接者の質問に解答するように「正しい」筋を口頭で説明し、反応時間もかなり短くユニット数自体も少なめであった。それは幼児自身の内面と通じた「自分の気持ちに正直な」ストーリーとは違うように思われた。このような幼児は園教諭からも適応上の問題を起こさない「いい子」と評されていた。DPT を自分の表象世界を動員して自由で想像的な表現の機会とはせず、正解のある文字通りのテストとして経験している様子には過剰適応の感が否めない。したがって協調的調節も一面的に望ましい調節と捉えるのは問題があると考える。反対に多少、非協調的交流調節がある幼児の作話の方が想像的で、何より幼児自身が生き生きと楽しむように作話していた。協調的交流が途絶えた空白（そのユニットはたいてい非協調的交流とコードされるが）こそ、幼児が自分の心の内に重心を置いた自分自身との交流に従事して

いる時間であり、その幼児ならではの独創的な筋や展開はこの空白を経た後に生じるように思われる。このような「関わらないという関わり」（斎藤 1998）という肯定的意義が、非協調的交流調節（中でも協働関係の不成立）には含まれているように思われる。以上、協調的調節、非協調的調節はそれぞれ両義的に捉える必要があり、協調的調節と心理的健康さとの関連を直線的にのみ理解するのは危険に思われる。

（4） 調節コードの活用

本研究の調節コードが示すものは、三項関係場面で象徴水準を主とする［他者と共に何かに従事するあり方］であり、乳児の相互交流プロセスの分析から得られる「他者と共にあるあり方」よりも、幼児の関係表象に直接的に迫り得るのではないかと考える。なぜなら幼児の作成したストーリーに表れる関係性が、面接者との関係で現実に演じられていると見て取れる例が結構あり、幼児はその関係表象に基づき、象徴水準でストーリー内の関係性を創造するだけでなく、非象徴水準で面接者との関係を営んでもいると考えられるからである。したがってDPTのストーリー内容に注目するだけでなく、その共同構築過程を両者の調節という二者関係システムの観点からも分析対象とすることで、幼児の表象世界の理解は大いに深められると考える。これは心理療法面接において、クライエントのナラティブと同時に今ここでのクライエントのやり取りに敏感であることの大切さに通じる。

次に、DPTを離れて、相互交流プロセスの調節という観点を如何に活用できるかを考えたい。まず臨床心理士の養成教育において、セラピストとして自分の関わり合いにどのような癖や偏りがあるのかを、客観的なデータを基に自覚するためのツールになると考える。今回の分析でも、面接者には自己調節スコアの上でかなりの個人差が見られた。セラピストの調節の偏りがクライエントの偏りと相まって両者の交流調節に如何なる特徴が生じるのか、それがまたセラピスト、クライエント双方の自己調節を如何に規定していくのか、という双方向のダイナミックな理解が、相互交流をプロセスとして逐一丹念に見ていくことで可能になると考える。これと同様に、養育者の子への関わり方を振り返る方法としても活用できる。DPTを用いなくとも、日常の育児は子との共同構築過程であるから、ある育児場面の両者の交流プロセスを詳細に検討することで、子と養育者が如何なる自己調節－相互交流調節のパターンにはまりやすいかを取り出すことができるだろうし、本研究のコードがパターンの可視化するための客観的な枠組みとして役立つと思われる。

最後に、心理臨床とは何か、臨床場面では何が生じているのか、そして何がクライエントに変化を引き起こすのかといった臨床心理学におけるプロセス研究への糸口になるのではないかと考える。先述したように乳児の相互交流プロセスの分析を心理臨床プロセスの解明に活かそうという試みは既に始まっている。それは、絶えることなく続いていく自己調節－相互交流調節の循環は、両者の表象世界を反映すると共に、両者の表象世界を絶えず更新する（Beebe, B., et al. 2000）という二者関係システムの理解に基づいている。本研究は象徴水準の調節がある程度可能な幼児を対象としており、非象徴水準の関係－行動レベルの調節から作話という象徴水準の調節へと行きつ戻りつする局面が顕わになり易く、それを面接者との関係性とストー

リーの両面から捉えることができる。それ故、乳児研究以上に表象世界の更新の現場を捉えうる位置にいるとも言えるだろう。本研究は未だ試行段階として、ユニット分割やコード化も全て筆者が一人で行っており、他者評定との一致度は調べておらず信頼性において重大な問題がある。コード化手法のシステム化などを徹底して進め、信頼性を高め他の研究者と共有できるものにしたいと考える。

引用文献

Allen, J. G. & Fonagy, P., Eds 2006 *Handbook of Mentalization-Based Treatment.*（狩野力八郎監訳「メンタライゼーション・ハンドブック MBT の基礎と臨床」2011 岩崎学術出版社）

Beebe, B., & Lachmann, F. M. 2002 *Infant Resarch and Adult Treatment*: Co-constructing Interactions. The Analytic Press, Inc., Publishers.（富樫公一監訳 2008「乳児研究と成人の精神分析」誠信書房）

Beebe, B., Knoblauch, S., Rustin, J., & Sorter, D. 2005 *Forms of Intersubjectivity in Infant Research and Adult Treatment.* Other Press Inc., New York.（丸田俊彦監訳 2008「乳児研究から大人の心理療法へ―間主観性さまざま― 岩崎学術出版社」

Bettens, C. G., Favez, N., & Stern, D. 2003. The Mother-Child Co-construction of an Event Lived by the Preschool Child: The Role of the Mother's Knowledge of "What Happened". In Emde, R., Wolf, D., & Oppenheim, D.,（Eds.）2003 *Revealing the inner worlds of young children*（268-301.）. The MacArthur Story Stem Battery and parent-child narratives. Oxford University Press.

Boston Change Process Study Group 2010 *Change in Psychotherapy*: A Unifying Paradigm. W. W. Norton & Company, Inc.（丸田俊彦訳 2011「解釈を越えて」岩崎学術出版社）

Emde, R. et al. 2003 The Structure of 5-Year-Old Children's Play Narratives Within the MacArthur Story Stem Methodology. In Emde, R., Wolf, D., & Oppenheim, D.,（Eds.）2003 *Revealing the inner worlds of young children.* The MacArthur Story Stem Battery and parent-child narratives. Oxford University Press.

Favez, N. 2003 Patterns of Maternal Affect Regulation During the Co-construction of Preschoolers' Autobiographical Narratives. In Emde, R., Wolf, D., & Oppenheim, D.,（Eds.）2003 *Revealing the inner worlds of young children*（302-323.）. The MacArthur Story Stem Battery and parent-child narratives. Oxford University Press.

石谷真一 2013 人形遊び技法におけるナラティブの共同構築過程 神戸女学院大学論集 第60巻第1号 52-74.

石谷真一 2009 人形遊びを用いたプレイ実習の報告とその教育的役割の検討 ヒューマンサイエンス No. 12. 19-30.

石谷真一 2012 人形遊び技法による子どものメンタライゼーションの評価 神戸女学院大学論集 第59巻第1号 22-38.

Nahum, J. 2000 An Overview of Louis Sander's Contribution to the Field of Mental Health. *Infant Mental Health Journal,* 22(1-2), 29-41.

Robinson, J. & Mantz-Simmons, L. 2003 The MacArthur Narrative Coding System: One Approach to Highlighting Affective Meaning making in the MacArthur Story Stem Battery. In Emde, R., Wolf, D., & Oppenheim, D.,（Eds.）2003 *Revealing the inner worlds of young children.* The MacArthur Story Stem Battery and parent-child narratives. Oxford University Press.

斎藤久美子 1998「関わり合う能力」―心理力動的検討―「能力という謎 シリーズ発達と障害を探る 第3巻」収録 pp. 147-171. ミネルヴァ書房 1998

Sander, L. 1975 Infant and Caretaking Environment: Investigation and Conceptualization of Adaptive Behavior in a System of Increasing Complexity. In E. James Anthony（Ed）, *Explorations in Child Psychiatry.* New York: PlenumPress.

Tronick, E. & Gianino, A. 1986 Interactive Mismatch and repair: Challenges to the Coping Infant. *Zero to Three:*

Bulletin of the National Center Clinical Infant Program, 5, 1-6.

Sander, L. 1977 The regulation of exchange in the infant-caretaker system and some aspects of the context-content relationship. In M. Lewis & L. Rosenblum (Eds.) *Interaction, conversation, and the development of Language* (315-327). New York: Basic Books.

Stern, D. 1985 *The Interpersonal World of the Infant.* New York: Basic Books.（小此木啓吾・丸田俊彦監訳 1989「乳児の対人世界」岩崎学術出版社）

Stern, D. 1995 *The Motherhood Constellation.: A unified view of Parent-infant psychotherapy.* New York: Basic Books.（馬場禮子、青木紀久代訳「親－乳幼児心理療法」岩崎学術出版社 2000）

Tronick, E. 1998 Dyadically Expanded States of Concious and the Process of Therapeutic Change. *Infant Mental Health Journal*, 19, 290-299.

Warren, S. 2003 Narrative Emotion Coding System (NEC). In Emde, R., Wolf, D., & Oppenheim, D., (Eds.) 2003 *Revealing the inner worlds of young children.* The MacArthur Story Stem Battery and parent-child narratives. Oxford University Press.

（原稿受理日　2014年 9 月24日）